

[活動報告]

「高校生が読む音声ガイド」の制作

2018年度「ニュー・ペインティングの時代」展での導入を中心に

柳澤宏美（高知県立美術館 学芸員）

[Activity Report]

**Production of a Voice Guide Spoken by High School Students
As introduced at the exhibition “The Age of New Painting” in 2019**

YANAGISAWA Hiromi

This text illustrates details related to the introduction of a voice guide at the museum. Outlined here is the process of production and implementation of an audio guide that made its debut at the exhibition “The Age of New Painting” in January 2019, including also preparations, response from visitors, and developments after that.

[活動報告]

「高校生が読む音声ガイド」の制作 2018年度「ニュー・ペインティングの時代」展での導入を中心に

柳澤 宏美（高知県立美術館学芸員）

はじめに

音声ガイドは展覧会における鑑賞ツールとして浸透しており、利用者はパネルで言及されていない作品に関する情報や関連する音楽などを聴くことができる。大型展ではアナウンサーや俳優などが読んだ音声ガイドがある一方、中小規模展や常設展では、職員や地元の人がかかわった音声ガイドを独自に制作し、無料で貸し出している館もある¹。当館では巡回展に組み込まれている音声ガイドを実施することはあったが、美術館が主体となって学芸員が原稿を執筆し、ナレーションを依頼して制作したことはなく、2018年度に行った展覧会で初めて独自の音声ガイドを制作した。本稿では導入した経緯をまとめたい。

1 栃木県立美術館では「学芸員を展示する」（2016年1月9日～3月21日）などの展覧会で栃木県内の女子高校の放送部が読む音声ガイドをiPod Touchで無料貸出していた。名古屋ポストン美術館では、アナウンサーが読んだ音声ガイドをSonyウォークマンで貸出す形で実施していた（有料）。どちらも200字から300字程度の原稿を学芸員が執筆していた。また高知県立坂本龍馬記念館では、AIによる音声ガイドを実施していた。

「ニュー・ペインティングの時代」展での音声ガイドの実施

当館では2019年1月19日から3月24日にかけて企画展「ニュー・ペインティングの時代」を実施した。本展は「表現主義および新表現主義の作品」という収集方針に従って集められた当館コレクションから1980年代を中心とする「新表現主義（ニュー・ペインティング）」の作品19点を展示するものであった。

展覧会の関連企画として、本展を担当した筆者から音声ガイドを作るという案を提案した。音声ガイドは、作品をより深く知ってもらうだけでなく、よりコレクションに親しんでもらうためのツールになると考えたためである。実施するにあたって、まず誰にガイドのナレーションを読んでもらうか、という問題があったが、利用する人だけでなくガイドの読み手となる人の鑑賞のきっかけになることを目指し、高知中央高校の放送部に依頼をすることにした。放送部は当時4名で、校内に併設されている高知シティFMのラジオ局を利用して活動している。音声ガイドの収録に際してその設備を使用できることも依頼する大きな要因となった。読み手の高校生にはただ用意された文章を読んでもらうだけでなく、作品を鑑賞した上で印象等をナレーションに付け加えてもらうことにした。そのためには作品鑑賞の機会を設ける必要がある。特に「ニュー・ペインティング」の動向に連なる作品の多くは、サイズが大きいという特徴を持っており、そのような大型作品は実際の展示を見てもらうことが重要と考えた。展覧会開幕後に鑑賞してもらってから音声ガイドを制作することとし、会期中から始める期間限定の「高校生が読む音声ガイド」となった。依頼に謝金等の費用が発生していないことから貸出は無料で行うことにした。

ナレーション原稿の執筆から実施までのスケジュールは下記の通りである。

2018年12月10日 原稿を読み手へ送付
2019年1月19日 展覧会開幕
2019年2月4日 展覧会見学
2019年2月8日 最終原稿送付
2019年2月12日 収録
2019年2月15日 データ納品
2019年2月27日 修正データ納品
2019年3月1日 貸出開始
2019年3月24日 展覧会終了

各作品の原稿は学芸員が執筆し、200字程度とした。音声で読むと各1分から1分半の長さとなり、1点の作品の前で聴くには少し長く感じる程度の時間となった。展示数が19点と少ないことから音声ガイドをつけるのは5点とした。5点の作品は下記の通りである。

エンツォ・クッキ 《高貴な炎の絵画》1983年
ジュリアン・シュナーベル 《無題（ローラ）》1987年
アンゼルム・キーファー 《アタノール》1988-91年
ジョナサン・ボロフスキー 《スプリット・ワイヤーの夢とおしゃべり男》1978-83年
ジャン＝ミシェル・バスキア 《フーイー》1982年

原稿は文字ではなく耳で聞いた場合に伝わるかどうかを意識し、さらに読み手となる高校生たちに作品鑑賞をしてもらった際、実際に読んでもらい、読みづらいところはないか、耳で聞いて分かりにくいところはないかなどのチェックも行った（図1）。原稿の練習期間を設けたのち、開幕後に行った鑑賞会を踏まえて内容を改めた原稿を最終原稿とした。もちろん、収録の際に気になる場所が出てくることも考えられたため、収録には学芸員も立ち会い、急な変更にも対応できるようにした（図2）。音声ガイドは3月1日から貸出を開始し、展覧会最終日までの約3週間運用した。

音声ガイドをどのような機材で利用できるようにするか、というのも導入の際に考えなければならなかったことだった。当館は収蔵品データベースとして早稲田システム開発株式会社の「IB.Museum」を導入しており、まずはそれと連動できる同社のスマートフォン用アプリ「ポケット学芸員」から音声ガイドを聞けるようにするという方法が考えられた。一方で、スマートフォンを持っていない人や外出先でのアプリのダウンロードに不慣れな人がいることも予想されたため、当館で機材を用意し、それを貸出して聞けるようにするのも重要だと考えた。来館者アンケートからは、特にコレクションを中心にした企画展は地元の人や高齢者が多いという傾向が読みとれ、多くの人に聞いてもらうためには貸出機材の用意は必須であった。操作のしやすい音声ガイド専用の機材の導入も検討したが、高額で、さらに専用の充電器などの周辺器械も必要になるため、断念した。最終的にタッチパネルではなく、ボタン式で一度操作方法を覚えれば簡単に使える、市



図1：作品鑑賞の様子



図2：収録の様子



図3：貸出機材

販されているポータブルオーディオプレーヤーの「ウォークマン」とヘッドホン
を各10台導入した(図3)。

実施後の反応

運用開始直後から好感触で、監視員も入口で積極的に利用を勧めてくれた。その際、利用が無料であることとガイドの読み手が地元の高校生であることが来館者の興味をひいたようだった。貸出台数も予想より多く、来場者数に対する貸出率も41パーセントと高かった。

アンケートから、県内外の来館者が音声ガイドを利用したことがわかった。展示作品がいわゆる20世紀後半の「現代アート」にカテゴライズされるものだったことから、取っつきにくい、という印象を持った人からは、音声ガイドによって作品がわかりやすくなったという声があった。また初めて音声ガイドを利用したという人や、期間限定の音声ガイドが始まったから2回目の来館をしたというリピーターの方もいた。

読み手となった高校生の反応としては、「難しい原稿でしたが、とてもおもしろく、作品を見る前からどんな作品なのかな、と考えている時もわくわくして楽しかったです」や「美術館はかた苦しいイメージでしたが、今回の音声ガイドのため美術館に行った時に、部員とこの作品はこうだね、とか感想を言いながら作品を見ることができ、かた苦しいイメージから自由に作品を楽しむことができるんだな、というイメージに変わりました」といった声があった。展覧会終了後も放送部のラジオ番組やコンテストの題材として音声ガイドの制作について言及しており、部活動のなかでも印象に残る挑戦になったようである。放送部の学生達にとっては日頃接しない美術館という場で使われるツールの音声というのがよい刺激になり、機会があればまた参加したいという声もあった。

高校生が読み手となったことで、来館者も気軽に音声ガイドを利用したと考えられる。加えて、読み手の家族、知人らが美術館に足を運ぶきっかけとなった側面もあった。

「ニュー・ペインティングの時代」後の展開

当館は、2019年4月から12月まで展示室天井の耐震工事のために休館し、2020年の1月にリニューアルオープンした。その際に、常設作品として展示しているシャガールの油彩作品5点および展示室外の館内に展示している常設作品6点に同じ放送部による音声ガイドを用意した。休館中に収録を行ったため読み手の高校生の作品鑑賞は音声ガイドの設置後となった。回廊などの無料スペースに設置されている作品もあるので、機材の管理と館内の動線を考慮してシャガール展示室のみウォークマンの貸出を行い、その他の場所ではアプリでの利用をお願いしている。

また2020年4月から5月にかけて行われた企画展「収集→保存 あつめてのこす」展(2020年4月4日～5月17日)でも、8点の作品に音声ガイドをつけた。「ニュー・ペインティングの時代」展と同じく収蔵品で構成された展示で、「収集」という美術館機能に注目したセクションでは、当時の新規収蔵作品の収集を担当

した各学芸員が音声ガイドの読み手となった。本展は新型コロナウイルス感染症対策のため、開幕直後の4月10日から5月10日まで休館し、開館したのは実質的に13日間のみとなった。休館中はアプリを使用すれば館外でも音声ガイドを聞くことができたため、休館中の活動としてSNS等で告知した。展覧会再開後も人同士の接触機会を減らすこと、また機材の消毒などが求められたため、アプリでの利用のみとなり、機材の貸出は2023年の5月から再開している。収蔵品以外では、巡回展「コレクター 福富太郎の眼」(2022年1月29日～3月21日)で高校生の読み手に学芸員が原稿を提供し、制作した音声ガイドの貸出を実施しており、現在も実施の機会を窺いながら不定期で継続している。

まとめ

音声ガイドを実施してみて、まず鑑賞ツールとして需要があることを強く感じた。最初の試みとなった「ニュー・ペインティングの時代」展は、読み手を高校の放送部の学生にしたが、その後実施したように美術館のスタッフや放送部以外の部活、声を使うことに興味のある大人たちに読み手になってもらうことも考えられる。収録についても様々な方法が考えられ、会期はじめから運用する場合は読み手の作品鑑賞前に収録しなければならない。鑑賞してからの収録は会期中からの運用になるが、展示を見ることで読み手が作品の理解を深める機会を得、アレンジを加えられるというメリットがある。展示品の種類や会期の長さなどによってより良い手法を探っていくことになるだろう。

今後は、この企画自体の広報を積極的に行い、幅広い方に関心を持ってもらい、読み手などの発掘につなげられれば、と考えている。音声ガイドというツールから美術館と利用者の恒常的な繋がりを保てるようになればよいと思う。